

金島書

配処はい

只こと葉はその夜は、大田の浦に留まり、蜚の庵の、磯枕し  
て、明くれば、山路を分け登りて、笠借りと云  
峠に着きて、駒を休めたり。此処は、都にても聞  
きし名所なれば、山は如何でか紅葉しぬらんと、  
夏山楓の病葉迄も、心有る様に思ひ染めてき。そ  
の儘山路を降り下れば、長谷と申て、観音の霊地  
わたらせ給。故郷にても、聞きし名仏にて渡らせ

給へば、懇ろに礼拝して、その夜は雑太の郡、新  
保と云所に着きぬ。国の守の代官、受け取りて、  
満福寺と申小院に宿せさせたり。この寺の有  
様、後ろには、寒松群立て、来ぬ秋誘ふ山風の、  
庭の梢に訪れて、陰は涼しき、遣り水の、苔を  
伝いて、岩垣の、露も雫も、滑らかにて、実に、  
星霜経りける有り様也。御本尊は、薬師の霊仏に

て渡らせ給由、主の御僧の仰せられし程に、いとゞ  
有り難き心地して、

下歌  
かし妙香の春の花、十悪の里迄も匂ひを為し、し  
ゆひやう真如の秋の月、五濁の水に宿るなる、誓  
ひの陰もあらたにて、庭の遣り水の、月にも澄む  
は心也。暫し身を、奥築き処、此処ながら、く、  
月は都の雲居ぞと、思ひ慰む斗こそ、老の寢覚め

の頼りなれ。げにや、罪無くて、配所の月を見る  
事は、古人の望みなるものを、身にも心の有るや  
らん、く。

〔口訳〕

その夜は大田の浦にとまり、海士の庵に磯枕の一夜をあかし、  
明くれば山路を分け登つて、笠借といふ峠に着いて、駒を休ま  
せた。此の処は、都に於ても聞いて居た名所であるので、夏山

楓の病葉の黄色を見るにつけても、古歌に「雨ふれど露も漏ら  
じを笠取の山はいかでか紅葉そめけむ」とよまれた事を思つて、  
その楓を心あるもののやうにも思つた事であつた。そして山路  
をおり下ると、長谷と申して、観世音をお祀り申した霊場があ  
る。故郷の大和でも聞いてゐた名仏であられるので、懇ろに礼  
拝申して、其の夜は、雑太の郡新保といふ所に到着した。国守  
の代官が自分の身柄を受取つて、満福寺といふ小さい寺に宿ら  
せた。この寺の有様を見ると、後方には寒松が簇立ち、来ぬ秋  
を誘ふ山風は庭の梢に訪れ、木蔭には涼しい遣り水が苔を伝つ

て流れ、岩垣は露や雫になめらかにうるほひ、誠に長い星霜を経た有様である。御本尊は薬師の靈仏であられる由を、主の御僧が仰せられたので、誠に有難い心地がして、かし妙香の春の花は十悪の里までも芳しく、しゅひやう真如の秋の月は五濁の水に宿るといふ、御誓願の御蔭もまことにあらたかで、庭の遣水にうつる月をながめるにつけても、先づ澄むものは心である。

暫時の身を置く所、そして我が墓所はかどころもやがて此処となるであらうが、照る月ばかりは、雲居の都を照らす月に変らぬものだと、それをせめてもの慰みとしてゐるだけが、老の寢覚のたよりで

ある。まことに思つて見れば、罪無くて配処の月を眺めるといふことは、古人が望んだことであるのだから、かやうな境涯になることは、自分にもさうした心があるのであらうか。